

表現アートを通じた教育に関する研究 —多文化社会における日本語教育に焦点をあてて—

14002EMM

高柳 有希

この研究では、現在学校において利用されている表現アートの実態を調査し、海外での実施調査を行う。ここでは特に、多文化社会であり、学校の中で表現アートを利用した教育の研究・実践が進んでいるアメリカ、カナダ、オーストラリアをはじめとする国々での実施状況を調査し、国際化する日本の学校における、外国人児童の日本語教育・適応指導、国際理解教育に生かすための手立てとそのための問題解決策を考案する。

表現アートとは、ビジュアルアート、ダンス・ムーブメント、ミュージック、ライティング、ドラマなど、さまざまな芸術媒体での表現を用いる統合的な芸術のことを示す。これをパーソン・センタードの理論に基づいて用い、人間の心や潜在能力にアクセスすることで、心身の解放、創造性の高揚、自己発見の促進（自己肯定感獲得による動機づけ）、問題解決能力、コミュニケーション能力促進といった効果が見込まれるとされている。

この効果を学習に取り入れ、様々な国で表現アートを通じた教育が行われている。これらの実践を、文献調査、授業観察、インタビューから分析した。その結果、理科、数学、生活、言語習得に特に大きな効果があり、特に言語習得では、長期実施により、マイノリティの人々に限らず多様な人々の学習促進に役立っていることも明らかになった。また、それぞれの事例で提案される表現アートを通じた授業のフォーマットは、国や多様な文化背景の違いに左右されず、流用可能ということも明らかになった。

私が実施調査として行った、Washington, D.C. の小学校で一ヵ月（一部一年）日本文化と日本語を教えるプロジェクトでは、文献研究の際にも効果が証明された「伝統芸術」「Book Making」「ミュージック」「ムーブメント」「ドラマ」の手法を組み合わせたプロジェクトを実行し、多文化社会で子どもたちに日本文化と日本語を教えることができた。このことから、これら各国で効果が証明された表現アートのフォーマットを応用して授業をおこなうことが可能であることと、学習活動において子どもたちは芸術を通して自ら表現を体験する活動が重要であるということが明らかになった。また、帰国後、日本人大学生にこのプログラムの様子を見てもらいアンケートを実施したところ、「このような授業を受けたい」「自分もこのような授業を行ってみたい」という前向きな意見が多く得られたことから、やはりこのプログラムが様々な人に効果が期待されることが伺えた。

しかし、表現アートを通じた教育を長期継続的に行うためには、既に学校が組んでいるカリキュラムにこの教育プランが埋め込まれなければならない、事実上実施が難しい現状が指摘されている。そのため、チームティーチングや芸術を通じた教育の専門家になることでの給料アップ、コーディネーターによるサポートや活動フィードバックの制度が充実している Washington, D.C. のプログラム中心に、プログラムとして質の良いと考えられるものを取り上げ、日本でもこれらプログラムを実行するためには、教師、生徒、芸術家など、プログラムに関わる人たちの利益とつり合いを生ませることが重要であると明らかになった。

今回私が提案、紹介したフォーマットが、これら問題点を改善して、国際化する学校教育に生かされることを期待する。